

- 健康面では、年間通して胃腸炎罹患児はいたが、症状が見られた時には掃除や消毒など感染防止に努め迅速に対応できたことで大きな感染拡大には至らずに済んだ。4 期にはインフルエンザが流行した。他には溶連菌感染症や水痘、突発性発疹、RS ウイルス等の感染症が見られた。また、気管支炎や肺炎で入院した児もいた。サーベイランスの活用により地域の情報も保護者に発信できた。
- ヒヤリハットは 14 件、事故は 19 件あり、そのうち受診した事故は 6 件あった。(転倒し切傷、頭部打撲、脱臼) 毎週の責任者会議にて事故発生防止のための委員会を行い、全体で周知してきた。
- 健康な身体づくりの土台として取り組んできた鍛錬は、一人一人の子どもの体調や体質、その時の気候に合わせてながら取り組むためには「いつもこうだから」「〇〇先生が言ったから」等ではなく、目の前の子どもの様子や自分の感覚から出発して「私はこう思う、こう感じるけどどうかな?」「こうすると気持ちいいね」等、感じたことや思っていることをもっと話し合いながら実践できると良かった。
- マラソンの取り組みを通して“今のこの子どもたちに合ったものに”という視点で見直す中で“子どもにとって大事なことは何か”と本質を捉え直す議論ができたことは良かった。ひなまつり会では緊張感と嬉しさの中で仲間や大人に支えられて、みたてつもりやごっこで遊ぶ楽しさや、役になりきりみんなで劇を作る達成感を感じることができた。また、みせっこや観る会、普段の交流の中で小さいクラスを応援したり大きいクラスに憧れたりする姿が見られ、“大きくなりたい”“大きくなった”自分を感じ、自信や成長に繋がっている。保育者は「子どもの発達や子どもが描くイメージに合っているか」「大人の思いの押し付けになっていないか」という観点で試行錯誤してきた。その過程で子どもの見方や発達について意見を出し合いながら十分に深め合い一緒に創りあげていくことは課題である。
- 保護者支援においては、保護者の思いに寄り添いながら、必要に応じて行政や専門機関とも連携をとりながら、その子にとって最善であり保護者自身も納得できる方法を一緒に探す努力をしてきた。
- 子育て支援センターでは日々親子と向き合い親のニーズや親子の状況を目の当たりにしながら、“今求められる支援とは?”と模索しながら実践してきた。悩むことも多いが、子育て支援センターの役割は“サービスの提供”ではなく“そこに存在する”ということが保護者の安心に繋がっていることを研修で学び、“日常の繰り返しの中で親子への支援を行う”ことの大事さを再認識した。来園する親子が安心でき元気になれる場であり続けることを大切にしていきたい。
- 病後児保育は年間延べ 245 件の利用があった。子どもの体調と集団保育との狭間で悩む保護者の思いにも丁寧に寄り添いながら受け入れ、親子が安心して過ごせるような関わりを心がけてきた。病後児保育室も子育て支援センター同様、“困った時は病後児保育がある”という安心の土台であり続けたい。また、地域との連携として、病後児保育事業の実習受け入れも行ってきた。
- 新保育所保育指針を学ぶ中で、共立福祉会が目指し実践してきた保育こそが大事であるという確信を持つことができた。しかし、指針の捉え方次第では子どもを評価したり画一的な保育をしかねないことも危惧されるため、これからも実践を検証しながら何を大事に保育すべきかということを繰り返しおさえ、園全体で確認していきたい。職員の自己評価では、どの職員も真摯に自己の課題や保育を振り返りながら園の基本理念を目指して、子どもたちがしっかり自分を出せるよう丁寧にその思いに向き合ってきた。しかし、職員間の連携や職員集団づくりにおいては課題もある。日頃から子どものことや保育のことをもっと語り合い話し合う中で、集団討議する力をつけていきたい。
- 保護者アンケートからは、園への理解や信頼、期待の中での厳しい意見を聴くことができ、保育の振り返りや保護者理解を深める良い機会となった。子どもも保護者も安心して過ごせる園づくりや保育実践に努めていく。